
マテオ・リッチと中国と日本

しのぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マテオ・リッチと中国と日本

【著者名】

しのぶ

ISBN

【あらすじ】
中国で宣教したイエズス会士マテオ・リッチの話

(前書き)

ほほほーんフヤクショーンです。小説としてどうかとも思こまへ。

マテオ・リッチは1552年、イタリアのマチョラータ市に生まれた。

当時マチョラータでは、周囲では戦争が起こり、町中では暴力沙汰が日常であった。

リッチが学校に通っていた通りではアラレオーナ家とペッリカーニ家が争つていて、白昼人が刺し殺され、ミサの最中に切り殺される者さえいた。

リッチが三歳の頃にはチミネツラ家の者三人が人を射殺し、五歳の時には、修道士までもが殺人を犯した。

聖職者や町の長老たちは争いをやめさせようと力を尽くしたが、リッチがローマに留学した時でも、まだこうした事件は日常だった。

また一方で、マチョラータのすぐ近くには奇跡によつてパレスチナから運ばれたと伝えられる聖堂があつて、リッチはこの聖堂に愛着を持ち、誇りに思つていた。

この頃はいわゆる対抗宗教改革の時代にあたる。

これより前、スペインではスペインを征服していたイスラム勢力が追い出され再征服が完了し、その勢いを駆つてスペインはアメリカ大陸まで征服していた。

また宗教改革でプロテスタントがカトリック教会から独立し、かつて一枚岩だった西方教会は分裂した。

かねてからカトリック教会の内外で、教会の腐敗が糾弾されていたので、プロテスタント側の批判もあり、カトリック側も自己改革と

伝統の擁護を行い、教会の刷新を図った。

こうした動きを対抗改革という。

カトリックとプロテスチントの争いは、しばしばヨーロッパ内の戦闘の原因にもなった。

そんなわけで、当時カトリック側ではカトリックの防衛と、再興、拡大のために熱心に活動が行われていた。

ローマはカトリックの中心地であり、教皇座のある街であり、数々の聖人の記憶の残る街であった。

そのローマで法律を勉強していたリッチは、イエズス会に入ることを志すようになり、実際そうした。

イエズス会はカトリックの修道会の一つで、特にヨーロッパを越えて、世界で宣教した事で有名である。

日本で宣教したフランシスコ・ザビエルもイエズス会士である。

アメリカ大陸では征服と宣教が平行して行われたことはリッチも知っていたが、元々こうした修道会は独立した団体で、国家の命令で動いているわけではない。

修道士含め、聖職者は戦闘も殺傷も禁じられているので、アメリカでのように軍の庇護が得られない場合、異教の外国に赴くのは常に危険があつた というより修道士になつた時点で常に危険があるのだが、リッチはこれを受け入れた。

もとより、聖職者は常に死も困難も覚悟するものだ。

歴代の聖人たちのように・・・

リッチから、イエズス会に入るつもりだと連絡を受けたリッチの父親は反対し、自らリッチを連れ戻そうとローマに向けて旅立つ。しかし旅の1日目を終えたところで高熱をだして倒れ、これは神の意志だと思つた父はリッチの入会を認めて、故郷に帰つた。

リッチはイエズス会の学校で神学や哲学を学び、また数学や科学などの教養も深めた。

リッチはインドに派遣され、そこでのイエズス会の学校で勉強をしていたが、この時、リッチと同じく聖職者になる勉強をしていた印度人の学生を神学と哲学の講義から排除するという決定が学校でなされた。

彼らに学問を身につけさせると、ヨーロッパ人の聖職者の言つことを聞かなくなるからといつ理由だつた。

リッチは反発して言つた。「そんな事をすれば彼らは私達を憎むようになりますよ。

それでは私達がこのインドで目指している、異教徒を改宗させ、私達の聖なる信仰にとどめるといつ目標を妨げる事になるのではないですか。」

こづした事の後に、リッチは、後に日本と中国の巡察師となるアレッサンドロ・ヴァリニャーノによつて、最近管轄下に入ったばかりの中国に派遣されることになつた。

中国への宣教はザビエルも志していたが、入国できないままザビエルはこの世を去つていた。

それで、リッチはマカオに渡り、そこでマカオに住む中国人や中国

の書物などから、中国語と中国文化を学びながら入国許可が降りるのを待っていた。

イエズス会では、「適応主義」という方法を探っていた。これは、外国でもヨーロッパ流のやり方を通すのではなく、現地の文化や習慣を尊重しつつカトリックの教えと合わせていく方法である。

リッチは、マカオで論語や書經、詩經など儒教の書物を学んだ。

そして儒教の道徳に感銘を受け、儒教の教えはキリスト教と基本的に相反しない上に、孔子は来世についてほとんど語らず、専ら地上で正しく生きる事を教えたものだから、キリスト教との共存は可能だと考へるようになつた。

後に中国本土に渡つて、リッチはこの考へを強めた。
一方、教義上の問題から仏教とは後に対立するようになつた。

マカオで中国の研究をしている間、あるヨーロッパ人神父がインドから上長として派遣されてきたが、彼は専らマカオのポルトガル人のみを相手にしており、

中国人を改宗させようという熱意はなく、むしろ中国人の改宗を喜んでいよいようちにさえ見えた。

彼はマカオの学校で勉強していた中国人キリスト教徒について、自分がここの中長として留まることになれば、あの連中には畑でも耕させておくつもりだと一度ならず言つた。

後に彼はインドに送り返されたが、彼のようないい人間は少なくなかつた。

リッチは、講義から外されたインドの神学生のことを思い出した。

リッチは厳しく、彼のよつたな宣教師は、

「学院の暮らしに慣れきつて、信者を愛する」ともできなくなつてしまつた」

と言い、さらに

「キリスト教の何たるかも理解していない」

とまで言つた。

こうした事があつたので、リッチは自らが中国に赴いて布教しようと強く願うようになった。

儒教では、武力による「霸道」ではなく、徳による「王道」を提唱している。

アメリカ大陸でのように武力によらず、キリスト教的徳によつて宣教するのは儒教での王道にあるものだ。

だから、儒教が尊ばれる中国ではきっと宣教が成功するはずだとリッチは信じた。

リッチがマカオにいる間に、ヴァリーヤーノが日本から、ローマへの使節と共にマカオに立ち寄つた。

この使節は日本のキリストン大名の子弟で、伊藤マンショ、千々石ミゲル、原マルチノ、中浦ジュリアンの四名、いわゆる天正少年使節である。

リッチは彼らとも会つたが、中浦ジュリアンは内氣そうな人物で、使節の役には不向きに思えた。

ある時、中浦が一人でリッチを訊ねて来て言つた。

「神父様は、故郷を離れて遠い異教の国まで宣教に來ることが恐ろ

しきはないのですか？」

リッチ「確かに不安はありますが、これは私の使命ですから」

中浦「そうですか・・・」

リッチ「あなたは、自分のローマへの旅が不安なのですね？」

中浦「そうです。それに、私の国でこの先キリスト教がどうなるのかも」

リッチ「神の至善なことを信頼することです。
たとえどんな困難や試練があるつとも、それを堪え忍ぶなら神があなたに報いてくれるという事を。」

中浦「・・・わかりました。」

やがて、ヴァリーヤーノは使節と共にマカオを発ち、リッチと仲間の神父たちは何度も追放された後、広東省の都市に住むことを許された。

そこでリッチ達が知ったのは、中国人の間には外国人に対して信じがたいほどの敵意があるということだった。広東省の人々は外国人を「外国の悪魔」としか呼ばなかつたし、外国人は皆人倫を持たない堕落した獣のような存在で、外国人が中国国内に住んでいれば、それは必ずなかひどい悪事を企んでいるのであって、災いの元だというのが大抵の見方だった。

こうした見方にも根拠がない訳ではなかつた。

実際、フィリピンのマニラでは中国系の住民が暴動を起こすのでは

ないかと恐れた総督が中国系住民を虐殺する事件が起こっていた。また、西洋人が訪れる以前から問題はあった。

この時代中国は明代だが、明はモンゴル人の元が中国を征服していだのを倒して興った王朝である。

そのため明は国粹主義的な時代だった。ちょうどスペインのようなものである。

また、明代は北では北方民族の攻撃、南では倭寇に悩まされていた時代である。

リッヂ達のいた広東省はちょうど外国と海と境を接していて、特に外国人への敵意が強かつた。

それに、明は鎖国政策を採っていたので、人々は外国のことなどほとんど知らず、中国が最も優れた国で、何かの点で中国より優れた国があるなどとは信じない、いわゆる中華思想もあった。

リッヂ達が住んでいた家のすぐ隣で塔が建てられていた。

近所の人々はリッヂ達を追い出そうとしてそこに登つてはリッヂ達の家に毎日石を投げたので、家はかなり破損した。

ある日、あまりこれが頻繁なので、家の者が石を投げた少年を捕えて、司法官に訴えると斬した。しかし近所の人々が少年を放してやつてくれと頼んだので、リッヂは少年を帰した。

ところが、人々は少年の親族を唆して、訴訟を起こさせた。

少年の親族の1人は少年を自分の弟だと言つて、外国人が弟を三日間も家に監禁して声が出なくなる薬を飲ませ、マカオに売り飛ばそうとしたと大声で訴えながら通りを練り歩いた。

街の人々もみな口裏を合わせたので、塔の工事監督たちが証言してくれなかつたら、リッヂ達は棒打ち刑をくらつて追放されるところだつた。

また、そこから別の方に移つた時には、ある夜家が武装した強盗達に襲われた。

この時リッチは扉をしめようとした手を斧で切られて負傷した。止められないと悟ったリッチは一階から飛び降りて逃げたが、この時足を挫いて歩けなくなつたので、大声で近所に助けを呼んだが、近所の人々は強盗とぐるになつていたので誰も助けに来なかつた。

すでにリッチが逃げたと思つた強盗達は去つていつたが、その後彼らは捕まつた。

彼らの中には身分の高い家の子弟も含まれていた。

リッチは、彼らが処刑されれば神父達に対する敵意が一層高まるこ

とを懸念し、

また攻撃されても許すというキリスト教的模範を示そうと思い、彼らのために、可能な限り司法官に執り成し、彼らを許すよう頼んだおかげで、彼らは死刑を免れて棒打ち二十で釈放された。

ところが彼らはその後再びリッチを訴えて街から追い出しあつた。これにはリッチも憤慨して、後に「いかにも異教徒らしい忘恩」と書き残した。

挫いた足はその後ずっと完治せず、長い距離を歩くことができなくなつた。

こうした事はその後も幾度となくあつた。

そのためか、リッチはまだ老境に達しないうちから髪も鬚も白くなつていた。

こうした事は外国人に対する敵意のためでもあつたが、やがてリッチは、こうした敵意や不信感は外国人に対してだけでなく、中国人

同士でも日常のこと気に付いた。

中国では礼儀が非常に大切にされるが、その裏では、本当は誰も信頼せず、他人同士はもとより、友人同士、親戚同士、皇帝と家臣、父と子の間でさえ常に相手に裏切られるのではないかと恐れ、警戒していた。

尊ばれているはずの儒教道徳も、実際は形骸化しているらしい。

この他にリッチが見た中国の悪弊は、星占いや怪しげな不老不死の方法や鍊金術の迷信が横行している事、無節操で、金があれば何人でも妻を買える事、生まれてきた望まれない子を殺したり売つたりする事、売春が横行し、さらには男色も当たり前である事、人々が平気で嘘を付くことなどがあつた。

偽証が普通に行われるという点では、リッチ達も訴えられたし、後には、このために黄明沙という中国人キリスト教徒が死亡することになった。

そのいきさつは、その頃マカオでは新たに赴任したマカオ司教をめぐつてポルトガル人の間で内紛が起こり、またオランダの海賊船のために防壁を築いていた。

これを見た中国側では、マカオが本土に反乱をたくらんでいると言われるようになった。

そんな中、黄明沙は呼ばれてマカオに行く途中で捕まり、彼を捕えた沿岸警備の隊長は、なにか報酬がもらえると期待して、その市の補佐官に黄明沙をマカオのスパイだと訴え、補佐官は黄明沙を拷問して、反乱の計画を自白させようとした。

黄明沙は拷問されても声もたてず耐え、潔白を証したが、告発者の方は、無実の人間を訴えて拷問にかけさせたということに

なれば自分が危ういので、なんとか彼が反乱をたくらんでいるという事を証明するため、黄明沙と同行していた少年を拷問して反乱の計画を自白させ、さらに黄明沙を拷問して自白をせようとした。

黄明沙は最後まで自白しなかつたが、「水を使った魔術」を警戒して水も与えられなかつたので、拷問を受けた後衰弱して獄中で死んだ。

後に、彼の無実は明らかになり、黄明沙はマカオに葬られた。

リッヂは彼の死を悼むあまり、彼は死んだ時キリストと同じ三十三歳だったと思い込んだが、実際は三十八歳だった。

しかしこうした悪弊も、つまりはこの国では長い間聖福音が知られてこなかつたからなのだ。

だから中国全体を改宗させればこういった悪弊も消え去り、中国人の魂を救う事ができる・・・リッヂはそう信じた。

一方、イエズス会では奴隸を使つていたし、リッヂは異端審問所の書物の検閲も良いことだと思っていた。ある時はマカオから中国本土に逃亡した奴隸を主人の元に送り返したりもした。

リッヂはそれを悪いとは思わなかつた。

なぜなら中国本土でも彼らは奴隸だつたし、なにより「彼らの魂は、これらの異教徒の間で滅びかかっていた」のを助けたのだから。書物の検閲は、中国の文人達にも高く評価された。

一方、日本の天正少年使節は1585年にローマに着き、教皇グレ

ゴリウス13世に謁見して歓迎を受け、ローマの市民権を送られた。この謁見の時、中浦ジュリアンは高熱を出していて参加できなかつた。

しかしどうしても教皇に会いたかつた中浦は、後で一人だけ、非公式に教皇に謁見した。

さらに教皇は毎日中浦を見舞い、ローマで最高の医者を探して看病させた。

この事に中浦はいたく感動して、ずっと後でも、この時の事を思い出す度に感動がよみがえつたといつ。

この出来事が、後に中浦の会つ苦難のなかで彼を支えていたのかもしれない。

リッチと共に入国した神父達の何人かが病氣で死亡した後、リッチにはようやく皇帝に謁見できる希望ができた。

これまで様々な困難があつたが、リッチは毎日勉強に努め今や中国語を流暢に話し、読み書きできるようになつていて。

神父達は最初仏教の僧侶の格好をしていたが、中国では仏教僧の地位が低く、人々から尊重されない事に気付いたので、この頃には儒者の服装をしていた。

また神父達は、適応主義に従つて中国風の名前を名乗つていた。

この頃、ヴァリニヤーノから、中国の宣教での上長に選ばれていたリッチは、名を利瑪竇といい、号を西泰と名乗つた。

リッチ達は努力の甲斐あつて幾らか良い信者や協力者を得ていたが、中国全体からすればそれはごく少数であつた。

皇帝に布教の許可を得ればもっと大きな成果を上げられると思われたので、リッチ達は贈り物を持って北京に赴いた。

しかしこの時には、豊臣秀吉が朝鮮で明軍と戦争していたので、外国人に対する敵意が強く、またリッチを鍊金術師だと思った宦官にリッチが鍊金術を教えたので、謁見できずに、南京に戻った。万暦帝はすでに長い間宫廷に引きこもつて外部の者と会わず、人々は宦官を通してしか皇帝と話せなかつたので、当時宦官は大きな権力をもつていた。

リッチは南京で父が死亡したという知らせを受けた。
リッチは数回の莊嚴ミサをあげて父を追悼した。

その後秀吉は禁教令を出し、これ以降日本ではキリスト教が迫害されるようになつていつた。

天正少年使節が日本に帰つてきた時には、すでに禁教令下であつた。

秀吉が病死して戦争が終わつたので、リッチ達は再び北京に赴いた。途中で馬堂という殘忍さで知られ誰からも恐れられていた宦官に捕まり、贈り物の多くを没収された。

馬堂が没収した品の中に十字架像があつたが、十字架上のキリストがリアルに作られ、血まで着色され、生きているように見えるものだつた。

馬堂は、これを皇帝を呪い殺すための道具だと言い立てた。
リッチ達はそうではないと説明したがなかなか理解してもらえず、監視をつけて監禁された。

このため命も危うかつたが、友人の官吏の助言で馬堂の歎心を買つよう努めたので、結局馬堂を通して皇帝に謁見した。

といつても皇帝に直接会うことは出来なかつたが、贈り物の時計や西洋絵画が功を奏したためか、北京に滞在する許可をもらい、布教も禁止されなかつたので、その後も北京や中国各地で布教を続けられた。

その後徐光啓という有力な官吏が改宗した。

彼は敬虔な信者だつたらしく、その後キリスト教徒のために様々な便宜を図つてくれた。

またリッヂは中国語で「四元行論」や「交友論」などの著作を表し、中国人の間で高い名声を得た。

またこの頃にはリッヂは中国の古典にも精通し、儒教の四書五經をラテン語に翻訳してイエズス会に送つたりもしていた。

そしてリッヂは、以前受けた父の死の知らせが誤報だつたことを知つた。当時、手紙を書いてもそれが届くまでかなりの時間がかかるし、無事に届く保証も無かつた。

それで、彼は父に向けた手紙で父へのいたわりと中国における布教の主な成果を書いた後、最後に書いた。

「この手紙が地上でお父さんに届くのか、あるいは天国で届くのかは分かりません。

とにかく私はお父さんに手紙を書きたかったのです。」

この手紙がマチュラータに届く前に、父は今度は本当に死去した。そしてその訃報がリッヂに届けられたが、その訃報が届く前にリッヂも世を去つたのである。

リッヂは休む間もなく働いていた上に、ひつきりなしに訪れる来客を迎える、中国の習慣に従つていちいち答礼に行つていた。

北京で科挙の試験が行われ、最も来客が多かつた年、リッヂは答礼訪問から帰つてみると病に倒れた。

リッヂは言った。

「今、死んで永遠の報いを受けるべきか、この宣教の仕事を続けるべきか、迷っています。」

「しかし、考えてみると、この中国宣教という事業を進めるためには、私が死んで、天から助けるのが一番いいのだとも思います。」

カトリックでは、天国に行つた人が地上にいる人々のために神に執り成しをして助ける事ができるという信仰がある。

リッヂはそのまま病氣から回復せず、数日後、寝台に座つたまま眠るようになつた。

リッヂの死の一年前に彼から洗礼を受けた李之藻という知事が彼のために棺を買い、あるキリスト教徒の文人の提案で、皇帝から埋葬地をもらおうという事になつた。

そこで李之藻が陳情書を作成し、皇帝はこれを許可し、土地を与えて彼の墓を作らせた。

外国人にこのような厚遇が与えられたのは驚異的なことだった。

とはいって、万曆帝は最後まで改宗しなかつたし、中国のキリスト教はその後もごく少数にとどまつた。

後にはある官吏の迫害で宣教師達が追放される事件も起つて、さらには禁教令が出された。

一方日本では、秀吉の命令で日本人キリスト教徒と宣教師合わせて26人が処刑されて以来、迫害が激しくなり、大規模な殉教が起つた。

26人の中の日本人は、フィリピン人スパイだと訴えられた。

神父になり地下活動をしていた中浦ジュリアンは、他の7名の宣教師、修道士と共に穴吊りの刑で処刑された。

これは汚物の詰まつた穴の上で逆さ吊りにして殺す刑で、頭に血が溜まり、目や耳から血を流しながら数日かけてじわじわと死に至るというもので、棄教すればいつでも逃れることができたので、宣教師の一人は苦痛に耐えきれず棄教したが、他の者は全員最後まで耐えて殉教した。

中浦ジュリアンは最後に

「私は、この目でローマを見た、中浦ジュリアンです。」

と言つて息絶えた。

また、パウロ内堀左右衛門という人は、縄で縛られて火山の火口の煮えたぎる熱湯の中に落とされでは引き上げられ、全身の皮膚が焼けただれて体液があふれだし、

「至聖なる聖体は、あがめられよかし！」

と叫んで死んだ。死体は火口に投げ捨てられた。

キリスト教徒達を処刑したある死刑執行人は、後にキリスト教に改宗して、自らも処刑されて殉教した。

危険を承知で東北で宣教していたカルバリヨ神父は、信者たちと共に

に厳寒のなか凍つた水の中で杭に縛り付けられ凍死した。処刑を見物していた人々は

「転べ（棄教しろ）！転べ！」

と罵声を浴びせたが、カルバリヨ神父は信者を励まし、彼ら全員の最後を見取った後自らも殉教した。

ルビノ神父とその一行は、7ヶ月、計105回に及ぶ拷問の末穴吊りの刑で殉教した。

これらは一例に過ぎない。

当時、世界で日本ほど多くの殉教者を出した国は無かつた。

こうした迫害に加え、重税の取り立てが加わって天草島原の乱が起り、そして日本は鎖国に入つていった。

東アジアでのカトリック宣教は、南米と違つて武力による征服を伴つてはいなかつたが、結局リッヂが望んだような、国全体の、王道による教化は起こらなかつた。

一方、武力で教化された南米は、現在世界最大のカトリック人口を抱えている。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8864n/>

マテオ・リッチと中国と日本

2011年2月7日22時46分発行